

第2回の今回はカウラ市についてお話しします。

前回少し触れましたように、着任の翌日にこの街を訪れるという、光栄と幸運を得ました。

シドニーからは西方向に向かって車で約5時間、人口1万3千人弱の市です。

豪州に関わった諸先輩は、この街を、日本とオーストラリアの二国間関係の“Spiritual Home”と呼んでいます。

前任者の「通信」で過去の歴史がより詳しく記されていますので、一部重複となりますが、先の大戦のさなか、1944年8月5日の未明、この街にあった捕虜収容所において、日本人捕虜の集団脱走事件(カウラ・ブレイクアウト)が発生しました。この収容所自体は、日本人捕虜に先立ち、イタリア人捕虜が多数を占めており、日本人捕虜は当時1100人近くいたと言われています。収容所が手狭になったことから、日本兵捕虜を将校・下士官とそれ以外の兵士に分け、後者を別の収容所施設に移送させる決定がなされたことが脱走事件のきっかけと言われます。もともと、1941年1月に陸軍大臣が定めた戦陣訓において「生きて虜囚の辱を受けず」と定められていたことから、捕虜になった日本兵は、国内に残された家族・親族が「非国民」と非難されることを恐れ、偽名を語る者が多数でした。そのような「不名誉な存在」であることに加え、将校・下士官から分離されるという「収容者の一体感の喪失」が兵士を決起に動かした。このあたりの心理描写は、日本ノンフィクション賞を受賞した「カウラの突撃ラッパ～零戦パイロットはなぜ死んだか」(中野不二男著、1991年)において、南忠男(偽名)飛行兵を中心に据えて詳しく描かれています。「戦士者と扱って欲しい者達の諦念と自暴自棄」のような感覚が通底にあったと感じます。ちなみに同書においては、収容所では捕虜による一定の自治が認められ、野球などのレクリエーションも行われるなど、オーストラリア軍による捕虜の適切な扱いも記されています。

集団脱走は失敗に終わります。日本人捕虜は、南忠男の突撃ラッパを合図に、身近にある食器類などを「武器」として脱走を試みましたが、結果は234名が死亡、その後逃走を続けた300余名の日本兵捕虜も捕獲されて終わります。この事件でオーストラリア兵の4名が死亡しました。

現在、カウラ市のオーストラリア人墓地に隣接して、日本人墓地が設置されています。カウラの退役軍人会は、かつての交戦国の国民の墓地も同じように良好な状態で維持管理をしてくださいました。その後、カウラにとどまらず、オーストラリア国内の他の収容所で死亡した日本人も合わせて、524基の墓が、カウラ日本人戦争墓地に収められるに至っています。

この墓地が今に至るまで感動的なまでに美しく維持されているのは、カウラ市をはじめ多くの関係者の善意と御尽力の賜です。

上皇・上皇后両陛下は、皇太子・皇太子妃両殿下であられた 1973 年に、この墓地を御訪問されており、また、秋篠宮皇嗣・皇太子妃両殿下も 1995 年に御訪問されています。

今回のカウラ訪問の二日目、ビル・ウェスト市長はじめ多くの関係者の参加を得て、慰霊祭が行われ、オーストラリア人墓地と日本人墓地の双方で献花をいたしました。日本の「さくら合唱団」とカウラ市の合唱団も参加くださいました。

カウラ市の合唱団が「君が代」を、「さくら合唱団」が「Advance Australia Fair」を斉唱されていたのが、印象的でした。



私自身は、2000 年代初めの英国での勤務時代、日英の和解に携わったことがあります。元 POW の英国人退役軍人と定期的に交流し対話することは重要な業務の一つでした。

(もっとも、これまでの私の外務省勤務は、ソ連による日ソ中立条約を無視しての対日参戦と満州侵攻、北方領土の不法占拠、その後のシベリア抑留といった、「同胞日本人が被害者となった」という立場での仕事が多かったように思います。)

オーストラリアとの和解も、先人たちによる努力と年月を要するものでした。

この過程で、戦争・憎悪・怨恨を乗り越え、善意と寛容の精神を示して両国の和解に貢献し、友好と絆の構築に大きな役割を果たしてきた、カウラ市。二国間関係の“Spiritual Home”と呼ばれるゆえんです。深い敬意と感謝の想いを抱かずにはられません。



日本人戦争墓地、オーストラリア人墓地と近接した区域に、美しい日本庭園があります。オーストラリアで最も美しいとの評判です。当地で亡くなられた日本人の慰霊、両国の和解、将来の友好を目的として、多数の関係者の尽力と協力により完成したものです。ボブ・グリフィス日本庭園理事長からは、庭園を設計した日本屈指の造園家である中島健氏は、大きな石を一つも動かすことなくこの庭園を造ったとの話を伺いました。

到着初日、この日本庭園での「さくらフェスティバル」に参加する機会に恵まれました。茶道、生け花、日本舞踊、合唱、着物、弓道、武術、マジック・手品など、様々な催しものが、美しい庭園を借景としながら、一日を通じて参加者の目を和ませていました。カウラ高校と留学生交流を続ける成蹊高校からの留学生が出店で奮闘している様子も拝見できました。

カウラにおける多くの方々の協力も得て、両国は、過去の不幸な時期に目を背けることなく、それを直視した上で、和解に取り組み、現在の友好関係を築くに至っています。

2014年7月、当時の安倍総理はオーストラリア国会両院総会で演説を行いました。「戦後を、それ以前の時代に対する痛切な反省とともに始めた日本人は、」で始まり、「皆さん(注;オーストラリアの人々)が日本に対して差し伸べた寛容の精神と、友情に、心からなる、感謝の意を表します。私たちは、皆さんの寛容と、過去の歴史を、決して忘れることはありません。」と述べられた上で、結びに、日本とオーストラリアの関係の明るい未来に確信を込めた期待を寄せられています。

今回、私の「仕事始め」がカウラ訪問になったこと、そこで多くの温かい方々の知己を得たことは、光栄であり、幸運なことであったと感じます。



参考 カウラ日本人墓地／Cowra Japanese War Cemetery  
(オンラインデータベース／Online Database)

<https://www.cowrajapanesecemetery.org/jp/> (日本語)

<https://cowrajapanesecemetery.org/> (英語)